

スタウロスの嘆き

中井英夫



潮出版社

中井 英夫（なかいひでお）作家。1922年東京に生れる。1974年、第2回泉鏡花賞受賞。著書『虚無への供物』（講談社）『中井英夫作品集』（三一書房）『見知らぬ旗』（河出書房新社）『幻想博物館』（平凡社）『眠るひとへの哀歌』（思潮社）『悪夢の骨牌』（平凡社）『黒鳥の囁き』（大和書房）『黒鳥の旅もしくは幻想庭園』（潮出版社）『彼方より』（潮出版社）『黒衣の短歌史』（潮出版社）等。

ケンタウロスの嘆き

昭和 50 年 3 月 20 日 印刷
昭和 50 年 3 月 25 日 発行

著 者 中 井 英 夫
発行者 島 津 矩 久

東京 都 新宿 区 南 元 町 14-1
発行所 株式会社 潮 出 版 社

電話(357)7111(代) 振替東京61090
〒 160

印刷 中央精版印刷

製本 鈴木製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

© H. Nakai 1975 Printed in Japan

ケンタウロスの嘆き・目次

I 作家と作品

A 三島由紀夫

ケンタウロスの嘆き 9

終りなき宴——『三島由紀夫全集』 25

見てしまった魂の不幸——『三島由紀夫十代作品集』 29

二度目の遺書——『小説とは何か』 32

B 川端康成

見えない遺書 35

C 吉行淳之介

夜の登音——『薔薇販売人』 42

小さな魔法——『焰の中』 48

D 寺山修司

炎の種子 55

E 北原白秋

昼見えぬ星 79

F 江戸川乱歩

美への愛憎——『一寸法師』 93

香り高い闇——『黒蜥蜴』 99

G 五木寛之

現代の疾走者——『風に吹かれて』 105

II 異端と幻想の文学

日本の異色作家 115

久生十蘭論 119

戦争と久生十蘭 135

異次元の作家たち——小栗・夢野・久生 143

地球への流刑者——小栗・夢野 150

悪夢の固まり——夢野久作 154

狂気のあかし——『ドグラ・マグラ』頌 157

異端の復権——久生・夢野・橘 163

廃園にて 177

金貨について 181

黒い水脈 183

III

カイン待望論

カイン待望論 191

短編よ、よみがえれ 199

影の会のこと——乱歩から清張へ 203

そしらぬ顔の故郷——わが町・わが本 216

憎むこと・愛すること——私の読書遍歴 223

本との出会い 227

空しい音——愛読者をさがす登場人物 229

血紅の美酒——泉鏡花に寄せて 235

夢への扉 238

手ぶくろ 245

IV

書評

美と恐怖の塔——江口裕子『エドガア・ポオ論考』 253

フィクシヨンの継目——富士正晴『廣・久坂葉子伝』 255

孤独な将棋さし——ノサック『わかつてるわ』 259

朝霧の彼方に——『木々高太郎全集』 262

生者の沈黙と死者の饒舌——渡辺温『アンドロギュノスの裔』 265

美の系譜——松田修『刺青・性・死』 269

凍りついた時間——船山馨『見知らぬ橋』 274

異端の美食家——中野美代子『迷宮としての人間』 276

登攀を許さぬ峻峰——『西東三鬼全句集』 280

流刑地の友へ——『加藤郁乎句集』 283

戦争の日々の哀歎——山田風太郎『滅失への青春』 286

痛ましい予言者——海野十三『敗戦日記』 290

つまり、そういうこと——吉行淳之介『湿った空乾いた空』 292

あとがき 293

装幀／建石修志
写真／斎藤秀一

I

作家と作品

ケンタウロスの嘆き

三島由紀夫の死は、いわばわれわれの足許から、突如として眼路の限りに口をひらいた暗黒のメイルストロームで、その巨大さ、奥深さは到底測り知れない。花東も悪罵も、すべてはめくるめく奔流の渦に巻きこまれ、いまなお目測も窺知も許さぬ勢いで奔騰を続けている。これが地底のどこに吸いこまれてゆくのか、なぜこんなにも突然この現象が出現したのか、それを確かめるには、ただひとつ身みずからを渦中に投じるほかはない。

刻々に色を変じ方向を転じながらも、なおこの渦が問いかけてやめないのは、揺れ動くとは知りながらついぞ沈まぬものと思いたしていた大地、すなわちわれわれの「生」についてであり、これまで確かに己れの足下に在ると信じていたその基盤は、みるみる崩れ壊えて渦の奔流に削り取られてゆくとおぼしい。さながら悪童の手ひどい悪戯に見舞われた夏の蟻のごとくにうろたえ走り廻るのが、目下のところ果し得る精いっぱいの所為であって、蟻の詩人、蟻の哲学者、蟻の心理学者等々が、束の間何事かを叫んで過ぎてゆくという光景も、またやむを得ない。ただその中でもっとも奇異に思われたのは、これほどの大事件を一言の下に裁断し去って恬然とし、ある

いはさかしらに擲擲の口調を弄して得意顔の批評家があまりにも数多かったことで、彼らにとって大地はつねに不動であり、チラとでも自らの生を疑うことのない習性がみごとに身についているものらしい。

果して三島の死は、それほど冷笑的に、一言を以て葬り去ることが出来るものなのか、死後十日を経たいま、蟻にも及ばぬ私には、抛たれ砕かれた鏡の細片を這いずりつつ拾い集めて、罅だらけの鏡面にかつがつの意味を映し取るほどの困難な作業に思われる。

三島の死の夜、煌々と空しい灯の下に坐って、たちまち眼前に顯つたのは、ギュスターブ・モローの油彩『死せる詩人を運ぶケンタウロス』であった。女人に見紛うほど白く輝かしいオルフェウスの亡骸をその腕に抱えあげたケンタウロスは、崇高な死の意味を知って深くうなだれている。かれはこれから、この稀有の詩人を、自分だけが知っている聖地へ運ぼうとしているのである。そして三島は、むろんのことオルフェウスではなく、筋骨逞しい半人半馬神の役割を選んだのであった。

*

この死には、何と多くの別な死が重なり、隠されていることだろう。あたかもくりのべられて

いた経文が、音を立てて一つに畳まれてもしたように。

*

ともに陽明学を信奉したといつて、大塩平八郎や吉田松陰までが引合いに出されているが、これら憂国の士の持つ「義」とか「信」とかは、おそらく三島の本心からあまりに遠い。

生涯の理想をそれに賭けた、性と死の一如を小説に生かすためには、二・二六事件さえその糖皮として用い、作品集にもっともらしいあとがきまで付してみせたこの稀代の作家には、むしろ輝かしい生涯の中でつねに背信をこととしたアテナイの人、アルキビアデスの像こそふさわしいと思われる。

*

叔父にして時めく権勢者ペリクレスの鐘愛を受けて育ち、美貌と徳性とをソクラテスに賞でられたアルキビアデスは、その花やかな生涯を屢々悖徳で彩った。彼にとっては、師や祖国を裏切るぐらいたやすく楽しいものはなかったのだろうが、その罰かどうか、彼の彫塑は、いまのところ鼻欠け像一基が確かなものとして残されている。

*

ところで十一月二十五日午後一時三十分、NHKTVが事件の詳細を伝えるに当って、まず掲げた三島の肖像は、片眼がふくれて妙な具合に垂れさがった、いかさま犯罪者にふさわしい顔つ

きのものであった。そのすばやい配慮は、いきなりの呼びすての呼称とともに、いたく視聴者の身に沁みたごとくである。このぶんでは、三島由紀夫の鼻欠け像が出廻るのに、さほど年月もかからぬに違いない。

*

天稟の才智は溢れるほどで、もてあました彼は、ことさらに悪名を喜んだ。月並な栄光やありふれた讃辞ほど退屈なものではなく、俗衆の喝采ばかりを追い求めていたが、こんな黒い欲望に限度のあったためしはない。まだその上にも人々を驚かせ、注目を一身に蒐めようとして、ついに——というのは、三島のことではない、ついに七千ドラクマで購ってアテナイの市民たちを羨望させていた美麗な愛犬の尾を、こともなく切断したのである。市民の非難が伝えられると、昂然とこう答えた。

「つまりは思う壺ってわけだ。犬の尾にかまけて、誰もそれ以上の悪口はいわないだろうからな」。

今日でも、アルキビアデスとその犬の逸話は、奇行を演じて注目を引こうとする、悪しき性さがの典型として伝えられている。

*

だが、二千四百年のち、三島由紀夫が切ってみせたのは、犬の尾ならぬ自分の腹で、それも、

深さ五センチ、引回し十三センチを真一文字にというこの数字はただごとではない。古来の武士といえども、刀を腹へ突き立てた瞬間に首を打落すのが介錯の作法だったのだから、この引回しは、ひたすら切腹だけを希った三島の執念で達成されたのである。本気で「義」とか「信」とかのために死ぬつもりだった森田必勝のほうに、浅い引掻き傷で終ったのは、必ずしも浅深の作法に則ったせいではない、イデオロギーがさして土壇場の役に立たないことの証しであろう。

*

活火山に噴騰する灼熱の熔岩は、つねに悖徳の方^{かた}へ、それも裏切りの喜びに溢れて流れ出ずにはいないのであろうか。

*

結局、アテナイの悖徳者のほうは、スパルタでは質素に、イオニアでは柔弱に、テッサリアでは乗馬をこととし、ペルシャでは豪奢を装いというふうに、カメレオンさながら、敵も味方も区別なく翻弄して廻っていたが、フリギアの寒村で「女に抱かれて眠りながら、しかも女になった夢を見ている」ところを、刺客に襲われて四十五年の生涯を閉じた。後世では政治家・軍人と呼んでいるが、何よりも稀代の夢想家だったとしかいいようはない。

*

三島もまた四十五歳で、奇妙な暗殺者の手に斃れた。忍び寄るアッササンは、他ならぬ彼の肉

体だったのである。だが三島は、その訪れをどれくらい待ち続けたことだろう！

*

夜ごと、門口に身を潜める刺客。月光を浴び、運河に影を落す長身の兵士が、もう身近かに迫っていることを、三島は知りぬいていた。怯えと期待。兵士の腰は、緩かな革の装具で蔽われている。その強い革の香に、少年はほとんど恍惚とした。走り出てその前に身を投げたい衝動を、おそらく彼は「四年待った。最後の一年は熱烈に待った。もう待てぬ」と告白するくらいに。

*

「自ら冒瀆する者」は、帳とばりの陰で逡巡を続ける三島自身の謂に他ならぬ。少年はついに走り出し、兵士の前に崩折れた。暗殺者の太い腕がそれを引き起す。眼と眼が見交す一瞬、この恋はまぎれもなく成就したのである。

**

新聞や週刊誌の中には、しごく単純に三島を異常性格者ときめつけ、最初から彼が自分の文学の主要テーマとして選び貫いた同性愛をも風俗の眼で眺めたあげく、ホモだオカマだと立ち騒ぐ向きまであるのには一驚した。死んだのは流行歌手でも映画スターでもない、戦後にもっとも豊かな、香り高い果実をもたらした作家である。彼の内部に眼玉ばかりが大きい腺病質の少年が棲